７ｔｈＤＯＲＡＧＯＮ２０２０―崩レ行ク世界デ

水無月 廿日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
７ｔｈＤＯＲＡＧＯＮ２０２０―崩レ行ク世界デ

【Ｎコード】
Ｎ０８５５Ｚ

【作者名】
水無月　廿日

【あらすじ】
２０２０年―世界は異界の花と竜に支配された。
同じ悲劇を繰り返さないため剣をとった少女『ミナト』
退屈な世界に飽きた少女『めぐ』
父親の力になるために戦う少女『琉衣』

それぞれの思いを胸に
３人の竜を狩る物語は始まる

Ｃａｐｔｅｒ０．０―それぞれの前夜―（前書き）

どうしても書きたいシーンがあるので書き始めました。

拙い文章ですが楽しんでもらえたら幸いです。

Ｃａｐｔｅｒ０．０―それぞれの前夜―

都内某所

「遂に来たね。」

「そうね…」

誰も知らないその場所に2人の少女がいた
一人は腰に二振りの剣を差している
もう一人は腰まである青い髪が特徴の少女だ

「今度は…勝てるかな？」

「それは解らない。絶対的な力に勝つには力が必要なの。」

「私は……力は嫌い。強い力は身を滅ぼす気がするの。大切な物もなにもかも壊れる気がする。」

「それは使い方次第よ。間違った使い方をすれば力は自分に牙を向くの。だから貴女は間違えないで。」

「うん。」

「そろそろ時間じゃない？」

「そうだね。行ってきます。」

「行ってらっしゃい。また後で会いましょ？」

その場所と、青い髪の少女に別れを告げ少女、『ミナト』は始まりの場所東京都庁に向かった。

都内某所—商店街

「貴方達…誰？」

数人の黒服の男に囲まれた一人の少女。

名前は兎我野（とがの）　めぐ

つい先日謎の火災により中学校が全焼する事件があったのだが、その生き残りの一人だ

「自己紹介が遅れました私達はムラクモ機関の者です」

「ムラクモ機関…あの？」

「はい。」

めぐは少し驚いていた。

都市伝説として噂が流れていたマモノ討伐を主とする機関

そんな怪しい機関が目の前にいるのだから。

「マモノ討伐が仕事の貴方達が何で私によう…なの？」

「それはですね、近々機関の候補生の選考会が東京都庁で……」

「そう。」

「強いては貴女に参加してもらう為に――うわっ？！」

話していた黒服が声をあげる。
見ると服がめらめらと燃えていた。

「長いわ。私、男の人嫌いなの。燃やしたくなる。」

淡々と喋るめぐ。
他の黒服にも火を放ちその場を去る。

「こんなつまらない世界……壊れればいい。」

そう言い残し、闇の中に消えていった。

「お、お母さんこれ見て！」

「どうしたの琉衣(ルイ)？」

「ムラクモ機関から召集状が来たの！」

青森県某所
とある少女の家
少女の名前は芦羽(あしば)　琉衣(るい)
元気一杯の高校生だ。

「ムラクモ機関…」

召集状をみて琉衣の母親は顔を歪める。

「貴女はどうしたいの？」

「私？……行ってみたい…かな？」

「そう…」

琉衣の母親は悩んでいた。
この娘を父親と同じ場所へ送っていいものか…
できることなら平和に暮らしていてほしかった。
しかし、

「だって父さんの力になれるんだよ！」

父親の力に為りたいという娘に、「行かないで」とは言えなかった。

「行って来なさい。」

「うん！」

玄関で琉衣を見送る。
怪我などしませんように……
母親はそう願い続けていた。

Ｃａｐｔｅｒ０．０―それぞれの前夜―（後書き）

ちなみにセブンスドラゴンクリア済です。

ｃａｐｔｅｒ０　カウント、ゼロ　１（前書き）

ミナト、めぐ、琉衣を１３班にするか悩み中の今日この頃。
新しい班でも作ろうかな？

ｃａｐｔｅｒ０　カウント、ゼロ　１

――『ミナト』視点

「や、やっとついた…」

結論から先に言うと私は試験に遅刻してしまったみたいだ。
都庁前の広場には候補生らしき人影はなく、いるのは自衛隊の面々と試験官らしき二人だけ。
遅れてきた私に気づいたのか、眼鏡をかけた青年が近づいてきた。

「ムラクモ候補生の娘だよね？えっと…」

「ミナトです。」

「そっか。僕はキリノよろしくね。うーん…ミナト君かぁ…どうしようなな…」

資料を見ながら唸っているキリノさん。
ふと隣にいる女性に目を移した。

「…日暈ナツメよ。ムラクモ機関の長をしているわ。…今日はどうして遅れたのかしら？」

「道に迷ってました。」

簡潔にそう答えた。

「そう…いいわ。キリノ、ガトウに連絡を。候補生2人追加よ」

「はい！」

いい返事の後にキリノさんは何処かへ連絡を取り始めた。

多分ナツメさんの言っていた、『ガトウ』とかいう人の所だろう。

……あれ？

そういえばナツメさんは候補生が2人って…

「あの…他にも遅れた娘がいるんですか？」

不思議に思いそう聞いたのだがナツメさんは首を傾げて私に言う。

「その腰にくっついてる娘？知り合いじゃなくて？」

「えっ？」

ナツメさんに言われた腰の辺りを見ると少女がくっついていた―

「だ、誰？！」

都庁の広場に私の声が響いた――

―めぐ視点

本当は行く気も無かったけど、退屈しのぎに都庁に来てみた
人の群れには近寄らず離れてみているとなにやら話が始まって
さらにはチームを組む人達
そして一通りチームができるとぞろぞろと都庁に入っていった。
……私一人。
候補生の居ない広場
皆都庁に入っていったせいで一人取り残されている。

…帰ろう

そう思っていたのだけど、気が変わった。
私が帰ろうとしたときに一人の少女が現れた。
腰に二振りの剣と、ショートカットが特徴の少女
気がつけば私は知らない彼女に抱きついた。
なんというか、こう…
凄く安心できる。

……いい匂い

どれだけくっついていただろうか？
ふと見上げると彼女と目があった。

「…兎我野めぐよろしく。」

「よ、よろし…く？」

私を見下げる彼女は困惑の表情を浮かべている。

―かわいいなぁ…
何故か昔から一緒にいたような…
そんな変な感覚に捕らわれる。

「―こほんっ。二人ともいいかしら？試験についてだけど……」

私と彼女の尊い時間を邪魔するナツメとかいう不粋な奴
…煩い
何？何なの？
そんなに私の邪魔をしたいの？
そんな女なんか燃えちゃえば――

そう思い、手に火を灯し火を彼女に移そうとしたのだが
その手を誰かの手が優しく包んだ。

――彼女だった

「―えっ？」

自分の手を通して手が焼かれる感覚が伝わってくる。
とめなきゃ！
そう思って焦ったせいか火は一向に弱まらない。

――どうしよう
私のせいでこの人は手に……

焦れば焦るだけその火は収まる気配がない。
体が震えてくる
私はまた…っ！

「…一回、深呼吸をして？焦っちゃダメだよ？」

「……うん。」

優しく私に語りかけてくる彼女
何故だか安易に飲み込めた言葉
できるだけ息を吸い、ゆっくりと吐く
そして意識を集中させ…

『消えろ…』

呟いた言葉と共に、火は消え去った
私は直ぐに回復のスキルを使った。
彼女の手が青い光に包まれみるみるうちに火傷は消え去った。

「―よしっ！偉いね♪」

わしゃわしゃと頭を撫でられる。

…悪くない。

「…決めた。」

「？」

「私とチームを組んでください。お願いします。」

無理矢理ついていくのではなく
ちゃんとお願いしよう。
そう思い頭を下げた――

―ミナト視点

彼女は真剣な眼差しで「お願いします。」と一言いった。
もとは、人と組む気は無かったが、状況が変わった。
めぐと名乗った少女に引かれ私は一緒に行こうと決意したのだった。

「そろそろいいかしら？」

「あっ！すみません！」

完全に置いてきぼりだったナツメに声をかけられ向き直る。

「さてこれからだけど貴女達には都庁に入り込んだマモノを倒してもらいます。」

マモノなら多分大丈夫だが…
私は都庁を見上げる

…多分いるね。

左に差した刀がカタカタと震えている。

「―所で試験は二人でいいのかしら？」

「「はい！」」

息が揃った返事

「それじゃあキリノから回復薬を受け取ったら試験開始よ。」

私達はキリノさんの所に行き回復薬を貰った。

「…さて、頑張ろうね。」

「…うん。」

腰にくっついてるめぐと二人の試験が始まった――

――琉衣視点

「いやぁああっ！！」

何？何あれ！？

青くておっきくて―

「ガァァアアア！」

「ひぃっ？！」

「グルルルル―」

「っ！…誰かたすけてぇっ！！」

都庁3階に叫び声が響いた―

ｃａｐｔｅｒ０　カウント、ゼロ　１（後書き）

感想お待ちしておりますｍ（＿＿）ｍ

ｃａｐｔｅｒ０　カウント、ゼロ　２（前書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます（＾＾

正直自己満足のために始めたのでお気に入り登録して貰えたのが凄く嬉しいです。

さて、今回ですがしっかりと描写出来ているのか凄く心配です。

特に、バトルは余り書いたことが無いのでちゃんと出来てなさそうで…

拙い文章ですが楽しんでもらえたら幸いです。

ｃａｐｔｅｒ０　カウント、ゼロ　２

――ミナト視点

「この部屋……」

３階を進んでいた時、不意に１つの部屋に突き当たった
中を確認しようとしたが良く見れば、扉の下から赤い液体が溢れ出していた。

（ひどい臭い…）

血の臭いの他に、何かが焦げた臭いも混じっていて、気持ちが悪くなる。

「―たすけてっ！」

「？！」

声が聞こえた。
助けを求める声が…
直ぐにでも助けに行きたかったのだが――

「だ、大丈夫？！」

さっきまでは普通だっためぐの様子が変わっていた。
まるで何かを怖がるように体を震わせて地面に座り込んでいた。

「ガァァァアアッ！」
３階に響き渡る轟音
間違いない。
―竜だ。
「―っ！」
最早一刻の猶予もないと、めぐを抱え部屋の扉を蹴り破った――

――琉衣視点

私以外のパーティーメンバーは皆、殺されてしまった。
デストロイヤーを名乗っていた大男は、体の上半分を食い千切られ、
残った下半身からは血が噴水のようにあふれでいた。
私を置いて逃げようとしていた、キャラTシャツを着たハッカーの
男の人は、逃げる途中で火球で丸焦げになってしまった
残るは私
どんな殺され方をされるんだろう―
もう、逃げる意欲も湧かない。
「グルルルルッ―」
一歩ずつ一歩ずつ…

青い巨体を揺らしながら奴は私に近づいてくる。
お母さんごめんなさい。
私、何もできなかったよ。
「…けて」
お父さん…
久しぶりにあいたかったなぁ…
身体中から全ての水分が溢れ出すなか、私は叫んだ。
「誰か…たすけてっ！！」
「ガァァァアアッ！」
私の声に刺激されたのか…奴は私向かって火を吐こうとしていた。
大きな口を宙にあげ、そこに火がたまっていく。
—さよなら。
恐怖の余り、目を瞑り体を強ばらせる。
—ドカンッ！
「ガルッ！？」
「えっ？！」
突如響いた音、奴と私はその方にくぎづげになった。
壊されたのは扉

そこにいたのは可愛い少女を小脇に抱えた、サムライの少女だった…

—ミナト視点

（何とか生きてるね！）

部屋に入って直ぐ私は生存者の確認をする。
すると部屋の隅に怯えて泣いている少女がいた
襲われる直前
何とか間に合ったみたいだ。

（でも…）

周りを見ると上半身の無い死体や丸焦げになった死体が転がっていた。

（助けられなかった…）

私が遅れてなければと後悔する

（何の為に私はっ！）

抱えていためぐを下ろし、刀を抜く。

「はぁぁあああっ！」

――一閃

「ガルッ？！」

竜の喉を切り裂き、血があふれでる。

一瞬ふらついた隙を見逃さず、次々に刀で切りつけていく。

―翼・脚・胴体……

切り傷は増えるものの、致命的な傷は与えられない。

「ガァアアアッ！」

「くふっ…」

意図しない方向からの尻尾の薙ぎ払い。

それをもろにくらってしまい、胃の中のものを吐き出した。

「はぁはぁ…」

「ガルルル―」

私の攻撃がある程度効いていたのか、止めを指しに来ようとする竜

牙を剥き出し、私を食べようと向かってきた。

（来たっ！）

私は勝負を決めるべく、刀を構えた。
そして向かってくる竜の口の中に刀を突き立てた。

「しねぇぇぇえ！」

一度刀が止まったところからもう一度深く押し込んだ。

「ガル…ッ……」

青い巨体が静かに崩れた

「―っ」

竜の口から刀を抜き、鞘にしまう。
戦闘が終わり、自分の腕から血があふれているのに気がついた。
どうやら刀を突き立てた時に牙に触れたらしく、皮膚がパックリと割れていた。
ポケットから痛み止を取りだし、軽く応急処置した後
直ぐに二人の所へ向かった

―めぐ視点

気がつけば知らない誰かに抱き抱えられていた。
しかし、なんだろう…
今すぐにこの場から逃げたい。
邪念…それと鼻をつく刺激臭が私をそう思わせていた。

「…離して。」

「あっ！起きたんだ大丈夫？」

…大丈夫な訳がない

と、あえていわず、無言で睨んでみた。
しかし…

「あぅぅ…怖かったよね…」

と、頭を撫でられた。
私を慰めようとしてくれたのだろう…だが今の状況では逆効果だ。
涙でびしょびしょに濡れた手で撫でられるのは嫌だ。

「…離して！」

今度は強くいってみた
だが……

「い、今は離れちゃダメだよ！」

「…？」

言われた言葉の意味が解らず、辺りを見渡してみる
すると、彼女…ミナトが青い竜と戦っていた。
竜を見るのは初めてだが直ぐに感じれた。
奴は危険だ。
そんな危険な奴と戦っているミナトを助けようとしたのだが…

「…駄目。」

どうも上手く力が纏まらない。
手が震え、集中出来ない
何も出来ずミナトを見ているのはとてももどかしかった…

―ミナト視点

「ミナトっ！」

涙目でめぐが私に飛び付いてきた。

「どうしたの？」

頭を撫でながら私は尋ねる。

するともじもじしながらめぐは、

「…臭い」

「なっ？！」

「あぁ…」

一人生き延びた少女を指差した。

まあ確かにそうだけども…

「めぐ…誰でもあの状況では仕方ないんだよ。」

「…そうなの？」

「そうだよ。だから臭いとか幾つになってとかいっちゃ駄目だからね。」

「…うん。」

とりあえずはめぐを納得させ、少女に近づいた。

「助けてくれてありがとう。」

少女は満面の笑みで私にお礼をいってきた。

「お礼を言われる筋合いは無いよ。実際、私は2人助けられなかったし…」

もう一度、死んでしまった二人を見る。
もっと速く来れば……
そんなことばかり考えてしまう。

「でも、貴女がいなきゃ私は助からなかったよ?だから、二人のことは気にしないで…覚悟はしてた筈だし……」

覚悟
死んでしまった二人も最初に聞いた筈だ。

「この試験に完全な命の保証はないわ。」

ナツメさんが言っていた言葉
確かにそうだ
実質二人は死んでしまった
それに…
もう動く事の無い竜を見る
都庁にはまだ竜がいる
多分奴…帝竜も…

―都庁屋上

「あはは…大ピンチ…」

「危機…ね」

「やべぇな。」

ミナト達より速く合格していたグループがいた。
赤い髪でポニーテールにしているデストロイヤーの少女
セーラー服に身を包んだサムライの少女
そして一人浮いている眼鏡のおっさん。

その三人が今対峙しているのは、真っ赤な体にそれを包む黒い甲殻を持った竜
後に、『ウォークライ』と呼ばれるようになる竜だ。

「なぁ…どうするよ？」

「どうするもこうするも…逃げ――」

「――れないわよ。絶対に。」

「むぅ…最後まで言わせてよっ！」

「おいおい…喧嘩は止めろって…そんな余裕ねぇだろ。」

「そう…だね。」

「さっ、気合い入れろよ。」

眼鏡のおっさんが二人を引っ張るように竜の前にたった。

「殺られる前に……殺るぞ！」

「仕方ない。」

「あいあいさー」

3人は無謀にも武器を取り
竜に挑んでいった……

ｃａｐｔｅｒ０　カウント、ゼロ　２（後書き）

ご意見感想お待ちしております（＜＜

ｃａｐｔｅｒ０　カウント、ゼロ　３（前書き）

今回はおっさんが主役です。

原作で見た目一番カッコいいですよね？

キャーってなりました！

とりあえず１３班（仮）はこのおっさんがリーダーですかね？

ミナトはガトウ班…１０班（仮）なのでｗ

ｃａｐｔｅｒ０　カウント、ゼロ　３

――都庁屋上

いつの時代だってやつらは無茶苦茶だった
圧倒的な力で世界を貪り、世界を壊していった。

「俺は何で闘ってんだろうな…」

「「……」」

二人に話しかけるが返事は帰ってこない。
ウォークライの攻撃を受け、瀕死の状態だ。

「…決めたのにな。なにやってんだか……」

自己嫌悪でイライラしてくる。
でもやることは決まっていた。
例え自分がどうなろうとも自分についてきてくれた二人は守りたい。
その為には…
目の前にいるウォークライを睨む。
―こいつを黙らせるか。

「その手伝い、私にもさせて貰えるかな？」

「……」

「なっ！無視？！」

「嫌、お前…変わったな。」

「そう？」

「まぁ、相変わらず女モテは激しいな。」

「煩いなぁ…」

回りに群がる二人を見ていったんだがな。
しかられた
俺の見解ではちびっこの方は確実に決まりだろ。
もう一人も……
まあいずれ虜にするんだろうけどな。

「ここで1つ提案だ。」

「何？」

「こいつらを連れて先にいってくれないか？」

倒れてる二人を指差す。

「わかった…なんて言うと思ったの？」

「…いや」

「解ってるなら言わない。ネコ、ダイゴ後は任せられる？」

「いいよ姉さんっ！」

「任せてくれ。」

ミナトが言うと二人の男女が現れた。
一人は猫耳のついたパーカーを来た眼鏡の少女と、
体に刺青の入ったゴッツイ男。
なかなか手練れだな。
見た瞬間そう確信する。
それと…

「なかなかいい眼鏡だな。」

つい話しかけてしまったが、
猫耳パーカーはなかなか趣味のいい眼鏡をしていた。

こっちの世界の眼鏡か…
いろいろ終わったら買いに行くか。
そう思っていると

「おっさんもね！」

と誉められた
ん？
ちょっと待て。

「…俺そんな老けてるか？」

「ん～。４０歳くらい？」

「まだ２６なんだが…」
「うそっ！？マジ？」
「マジだ。」
やれやれ何処へいっても俺はおっさんか…
「はいっ。イチャイチャしなーい。」
「い、イチャイチャ何てしないよ！」
「ただ眼鏡について語っていただけだ。」
誤解されないようにキッパリと断っておいた。
だが、何故か少し悲しそうな寂しそうな…そんなネコがいた。
「さっ、後は任せたね。」
「了解っ！」
「解った。」
倒れていた二人を連れ、４人は屋上を後にした。
「さてと…とりあえず半殺しか？」
「それぐらいね。」
俺は銃をホルスターにしまい、愛用のナイフを取り出した。

「まだ、それつかってんだ。」
「これが一番しっくり来るしな。」
「こうして闘うの久しぶりね」
「そうだな。」
ミナトも準備が出来たのか、刀をいつの間にか抜いていた。
「さぁ…楽しもうぜ」
「はいはい。」
「ガァアアアッ！！」
待っていたぞとでも言いたそうに雄叫びをあげたウォークライ。
さて。
ショータイムの始まりだ！

ｃａｐｔｅｒ０　カウント、ゼロ　３（後書き）

今回から後書きでちょっとした設定や裏場面？など書いていこうと思います！

まず今回の場面から…
ちびっこと思われてためぐはと言うと……
何？あのおっさん…。私のミナト（予定）に気安く話しかけてて……
燃やしてやる…
等とブラックになってたりなかったり……
ネコと話してるときには
決めた。あのおっさんはこの猫耳女とくっ付ける…
と決意してたりします
私の頭の中でですがｗ

「楽しみ」
と、一人でも思ってくれる人がいれば頑張れちゃいます！（＾＾
また次回を楽しみにしててください♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0855z/

７ｔｈＤＯＲＡＧＯＮ２０２０―崩レ行ク世界デ

2011年12月13日08時47分発行